

令和元年度第1回SGH運営指導委員会議事録

三小田 博 昭

1. 日時

令和元年11月21日（木）13時00分～15時00分

2. 場所

名古屋大学教育学部附属中・高等学校 第1会議室

3. 出席者（敬称略）

運営指導委員

辻村哲夫（公益財団法人 学習情報研究センター
理事長）

山田和人（同志社大学 文学部国文学科 教授）

古澤礼太（中部ESD 拠点協議会 事務局長）

堀 雅寿（愛知電機㈱ 社外監査役、
ユニゾンキャピタル㈱マネジメン
アドバイザー）

オブザーバー

中東正文（名古屋大学副総長）

本校教職員

校長、三小田、石川、原、福岡

4. 内容

1) 学校長挨拶・自己紹介

2) SGH概略について

・先ずレジメの1枚目、本校の行っている研究開発スーパーグローバルハイスクールのポンチ絵です。繰り返しのようになりますが、私たちの5年間の目標としては、物事の本質を捉え国際的な視野を持って探究し続ける勇気と判断力のある「自立した学習者」を育成すること、子どもたちがこのプログラムを通して「自立した学習者」に成長していかれるかと思っております。本校は併設型の中間一貫校であり、中学は課題探究Ⅰ、高校は課題探究Ⅱで中学・高校それぞれ課題探究を行っております。中学は調べ学習を中心として幅広い興味関心を広げるということで、最初から子どもたちがテーマを1つ決めるのではなく、中1・中2・中3というふうに各学年で大きなテーマを学校が

作り、その中で子どもたちが自分たちで調べ学習をしていくということになります。高校では中学で行った課題探究Ⅰ、調べ学習を中心として自分たちが興味関心を持った中から1つ、自分の最も興味関心のあるものを選びそれを3年間かけて、今度は仮説検証型学習と言っていますが、仮説を立てそれを様々は方向で検証して最後に論文にまとめるという形をとっています。そのような中、グローバルキャリアモデルシンポジウムという学外から第一線で活躍されている先生方や卒業生に来てもらいお話しをしてもらっています。今年度は6月にノーベル物理学賞受賞者である名古屋大学の天野先生にお話をいただきました。それからもう一人、本校の卒業生でNHKやメーテレなどで気象キャスターをやっていた卒業生、虫鹿里佳さんに気象予報士からみる今後の地球環境や放送局・テレビ局などについてお話をしてもらいました。研究開発単位Ⅱは、「国際的教養を身に付ける」ということで、既存教科の中でも協同的な学びを行っていく、既存教科と課題探究が離れていては学校の中のカリキュラムとして成り立っていきませんので、既存教科の中でも協同的な学びをしていこうと、芸術系の科目も入れて協同的な探究的な学びをしています。3つ目の真ん中にあります研究開発単位Ⅲ、これは名古屋大学と連携して、国内拠点それから海外拠点という2つ拠点を設けています。国内拠点というのは後ほど説明をさせていただきますが、今年度は名古屋大学を会場に国際会議を本校が主催しました。それが今年、5年間の集大成と言っているものではないかと思えます。そして海外拠点は名古屋大学海外事務所と連携をさせていただき、その現地の高等学校と交流をしながら共同で課題研究をしています。これまではモンゴルとノースカロライナでしたが、昨年度からはヨーロッパ拠点としてリトアニアの学校とも交流をしています。このようにアジア拠点、北米拠点、そしてヨーロッパ拠点というふうに3つの拠点を設けて国際交流をしています。こういったものが本校のSGHの概要になります。

3) 課題研究Ⅱについて

・ポンチ絵の中の課題研究Ⅱについてのご説明をさせていただきます。この課題研究Ⅱというのは高校1年生、高校2年生、高校3年生の続きのものです。中学

のほうは各学年で大テーマがあり、その中で生徒が決めるという取り組みでしたが、高校生では各個人で決めたテーマについて課題探究を行います。高校1年生の前半は準備段階のような形になっています。PBLを学んだり探究方法を学んだり、グループを組んで1つのテーマについて探究してからそれぞれの個人のテーマについて探究するという流れになっています。本校でいうPBLというのはProblemのほうのPを設定しております。この課題の例ですが、本校は生徒が1学年で120人いますのでそれを6個のグループに分け6個のグループの中でそれぞれ1つのテーマを生徒が選び、そこでそのテーマについて問題解決をして行こうというプログラムになっています。最初のオリエンテーションで私たちが生徒に求めるものをプリントで配っております。次に7番の年間計画ですが、これは高校1年生の年間計画となっております。本日は11月21日ですので、下から3分の1くらいのところが本日の日程です。本日授業見学していただくところは第2次課題解決です。6つのグループに分かれています。今年度のテーマは次のようになります。例えば「名大附属の下校時刻は適正か」、「名大附属の図書館の貸し出しを増やすにはどうすればいいか、についてグループ毎に研究をしております。本日、のち程ご覧いただくのがこの高校1年生の総合人間科で6つのグループに分かれておりますので、そのグループでの活動を見ていただきたいと思っております。その後どうなっていくかということも大事だと思いますので、高校2年生についても簡単にご説明させていただきます。高校2年生総合人間科というガイダンスプリントをご覧ください。ここは高1の最後くらいで自分のテーマを何にしようかと考えていた生徒が高校2年生の最初に2年間にわたって研究するテーマを決めます。生徒はエビデンスブックという本を持っていますので、それにしっかり記録をしていくというような指導も最初にします。また文献を引用する時に後でどこから引用したか分からなくなってしまうので、引用文献を書くようなプリントも別に刷りまして、それもエビデンスブックに貼らせそこに書いていくということもしています。このエビデンスブックを使うことで時々チェックが出来、子どもたちの研究の流れが記録できるというメリットがあるかと思っています。その生徒が書いた研究テーマを元にして6つのグループに分けています。20人で1つのグループということでそれぞれに担当教員がつきますが、レジメにありますように「心・文化・人権・生命・自然・平和」と非常にざっくりではありますが、このような領域に分け、多少無理のある時もありますがだいたい20人くらいになるように分けて教員が指導をしています。テーマ設定をしましてもテーマが小さ過ぎたり大き過ぎたりということがあ

りますので、最初から教員がカウンセリングをしていくという形を取っています。1年の流れですが大きく分けると3期、3つのローテーションになるように組んでいます。なかなかこの通りにいかないこともありますが、このようなサイクルにすることによって生徒が今まででどこまで進んだのか、あと何をしないといけないのかというようにもう1度自分の軌跡を振り返ることが出来るということでこのように1年間を3つに分けるというような取り組みをしています。その都度、報告書があり教員も進み具合をそれで把握していくという形でやっています。探究活動は高3で纏めますので、まだまだ中間ではありますがこの1年間の取り組みを明日22日の発表会に向けて準備をする形になっていると思います。このようにして1年間取り組みをした後に高校3年生となり、また個々にレポートにしていきます。レポートの後は研究集録という生徒全員のものを書き、それをまた共有していく発表する、というような形で各自の研究だけではなくて他の者が研究している内容やその手法も一緒に学び、多くのアプローチの仕方を同時に学んでいこうという取り組みを所々に入れていく、それが特徴の一つではないかと思っております。

- ・これでSGH5年目になりますのでまだ数は多くはないのですが、卒業生の追跡調査ということでサーベイモンキーという統計ソフトを使い、少し前の卒業生からもアンケートに答えてもらっています。他にもまだ項目がありますがこれに特化したものと先ほどから話のありました「課題研究は大学の選択に役立ちましたか」というアンケートを取らせてもらったところ、多くの子たちに高校でやった課題研究が大学の選択に何らかの影響を与えているということがわかります。そして「その課題研究の内容が大学での研究につながっていますか」というところで「いいえ」の子が多いのですが、これがもう少し「はい」の子が多くなってきて、高校でやっているものが大学での研究に中身として繋がっていくといいかなと思っていますが、4割くらいの子が高校でやったものが大学での研究に繋がっているというように答えています。また、大学でのいわゆる答えのない学び「研究」というものに対して、高校のほうは「学習」覚えることが中心になりますが、そういった答えのない学びである大学での学びに協同的な学びがどのくらい役立ちましたかという質問で、多くの子が「高校での仮説検証学習や友達と共同で実験をしたということが大学での学び方に影響を与えている」と答えてくれています。それから「海外勤務に行きたい」という子たちはまだ多くはないです。最後が「大学卒業後、就職しても自分の興味関心のある分野に関して学び続けていきたいですか」とい

う事に関しては多くの子たちが「はい」と答えています。本校のHPからアンケートに答えられるようになっていきますので、卒業生アンケートへの回答を同窓会組織等にはお願いはしていますが、今後どうやって卒業生にアンケートに答えてもらおうかということを考えています。

(質疑応答)

・領域が6領域ありますが、1年生は関係ない形で準備をするという理解でよろしいですか？それから3年生は研究レポート書くというと、それは授業の形態としてはもう授業ではなく個人がその時間になったら個々にレポートを作成するに時間に充てている、というような理解でよろしいでしょうか？

⇒まず、前半の6領域に分かれるのは高校1年生の後半です。前半は一緒にブレインストーミング的なことも含めながら行い、後半で個人の課題探究の練習となるような6つの領域に分かれ、高校3年生になりますと個人で書きます。形態としてはそこが主流、個人で纏めるのが主流にはなりますが、所々で中間報告を行い他の人がどのくらい進んでいるかも知る機会がある状態で行っています。

・1年生のグループは2年生になるとまたもう1回やる、ということですか。

⇒はい。後半といったのは、今頃から2年生になったら何をするか、今やっている手法で何が出来るかを考え始めなさいという形で伝えて、2年生のグループが3年生でも同じグループで活動しています。

・細かいことですが、前にも話題になったかと思うのですが120人を20人の6グループに分けるわけですよね。このグループ分けのやり方というかプロセスはどんな感じでしょうか。

⇒高校1年生は機械的です。恐らく名簿の前半とか後半とかいう分け方で行っているのではないかと思います。

・つまり、自分の関心のある領域を選ぶわけではない。

⇒今年の高1は違います。これも5年かけて色々変わってきました。初めは希望でやっていましたがそうなる20人ぴったりとはいかず、今は希望通りということではなく、そのクラス40人を2つに分けて担任と副担任というような形で分かれることもあると思います。

・機械的かというとのは一応名簿順とか、そういう感じですね。

⇒今年はまだ分かりませんが、今までは違っていました。ABCの3クラスごちゃ混ぜに、という時もありました。

・そういう関心や興味などに集中させるという意味で言えば理想は「希望」が理想だと思います。ところが実際にやってみると我々もそうですが、なかなかきれいには分かれてくれずその時に色々調整をしないと行けないので、多分、第1希望・第2希望・第3希望としたと思います。そういう結構煩わしいことをしないと行けないので、その煩瑣のところや色々な事があって改良・改善を大分なさってきたのかなあと、希望型から割当型に変わってきたという一番大きな要因は何なのか質問させていただきました。

⇒今年がどのように行っているか分からないので正確にはお答えできませんが、その割当式にしてもこのようなテーマであれば誰でも話せる、逆に言うと、そうするとこういうテーマになっていくと思われれます。高2・高3では自分の興味があることを本当にピンポイントで行いますので、それとは違うところで練習するのも役には立つと思っています。しかし、これは学年の裁量にある程度任されておりまして、年度によって少し違うやり方をしているというのが現状です。

・分かりました。実際にPBLでやっているところでも2通りあり、とりあえず割り当てて始めるところと、それから今言われたように希望を募るところと大体その2つの方式がある。いずれも実施されているので、附属学校の場合はグループ分け方法が移って行ったというようなことを聞いたので、何故移ったのかなという事を質問しました。

⇒更に今年の特徴は、今までは前期に講義形式で行いそして後半に6つに分かれてという形式でしたが、そうすると前期の内容がなかなか活きない、難しかったり忘れてしまうということで、「問いの立て方はこうします」、「文献の探し方はこうします」といった事を前期・後期ではなく少しずつ入れながら進めていきたいと思います。ですから一番最初の高1の時に何が興味ありますかと言われても困るという事と、附属学校に中学から入学して調べ学習をやったことがある子と附属高校から入学して課題研究に対する知識があまりない子とのギャップがあるので、始めから機械的に分け、やりながら全部平行して進めようという事で始まりました。それで余計に希望ではなく機械的ということに進めているのだと思います。

4) SGHグローバルプログラムについて

・このグローバルプログラムというのは最初のポンチ絵の研究開発単位Ⅲにあたるものです。研究開発単位ⅢはこのⅠとⅡを何かに活かしたいとのことで最初に用意したのが国内拠点・海外拠点でした。これで5年が経つわけですが、SGHに指定されたら色々な学校等か

らイベントのお誘いも受けますし、生徒のほうからも自発的に模擬国連に出場してみたい等という事が出てきて、また学校で決めた海外拠点・国内拠点もポイントのイベントだけには終わらせたくなかったので、部活のようなグローバルコミッティに入った人にイベント等の紹介をしています。こちらのコミッティの団体がしたグローバルな活動を今から少しお話ししたいと思います。また、中学生の生徒や保護者からの要望もありましてグローバルコミティジュニアというものも立ち上げました。海外には行けませんが海外からの来客時にはジュニアの子たちにも声をかけるとみんな喜んで参加してくれこちらも盛況です。

課題研究の次ページに「He For She」がありますが、これは資生堂さんと国連のUN-Womenさんが開催しているもので名古屋大学がGender Research Libraryを拠点にこのHe For Sheの活動をしているため昨年度も参加しています。SDGsの中の5番目ジェンダーについて、これを先ほどのグローバルコミッティに申し込んだ子に参加を募り、5つのグループ全員で22名が自分たちでグループとテーマを決めてきました。それを資生堂さんとUN-Women日本に伝えたところ20人以上でしたので本校にワークショップに来てくださり、SDGs 5番目のジェンダーだけでなくSDGs全体の例えば教育にもこのような影響がある等のレクチャーを受け、そして自分たちで10分以内の動画を作成し国連のほうに送ったものがこれです。それを私たち今ここにいるメンバーと本校の元校長先生である高大接続センターの大谷先生に審査員に入ってもらい、国連の審査基準でルーブリックを作成し審査して5グループ目のグループ名「#Ku Too」という高2の女子が作成した職場での女性ハイヒール強制をやめようという内容の動画を選びエントリーしました。8校が全国大会出場できたのですが、評価ではあと2点足りませんでした。何が足りなかったか全部書いてくれたのですが、全国大会には高校生で出来ることは何かというのがしっかりしているグループが選ばれており、本校のグループはちょっと具体性に欠けるというか、私たちは啓発のためにポスターを貼ろうということだったのですが、評価ではSNS時代なのでそれをSNSですることはどうかと言われました。実は私たちがSNSを考えたのですが、本校はSNSに対しては少し警戒心があり生徒に自由にさせていないので敢えて生徒には提案しなかったのも、そこがちょっと惜しかったと思われる点です。全国大会には行けませんでした。今度この子たちは東京国際フォーラムで行われる全国高校生フォーラムに参加します。また、これは国内だけの話になっていましたがこのメンバーの生徒はほとんどが留学経験があり海外に友達がいるので、海外事情や靴・ハイヒールだけでなく制服や服装のドレ

スコート等と幅広く聞いてポスター発表をさせようと思っています。このようにSGHが5年で色々なもの、色々な所で芽が出てきたというのが感想です。

次は2019年度のアジア高校生国際会議というものです。こちらはこの冊子で国内の開発単位Ⅲで、今まではグローバルディスカッションという名称で、場所は本校で本校以外の高校生にも呼びかけ、日本の高校生と名古屋大学に留学をしている大学生にも参加してもらいディスカッションをしていました。それがこの度、AFSという高校の留学団体も日本の高校生と交流をしたいということで連絡がありましたので、これまでのように名古屋大学の留学生に先生役になってもらい、高校生の留学生と日本の高校生をディスカッションさせようということで計画を立てました。国内の高校生と名古屋大学の留学生だけでやっていた時には名古屋大学：土井先生が中心で行われていましたが、今年のアジア高校生国際会議は高校生の留学生が主にアジアから115名と本校から5名、そのほかに近隣の愛知県立旭丘高校、金城学院高校、愛知県立瑞陵高校、名城大附属高校、南山高校女子部、他県から東京大学附属高校、東京学芸大学国際中等教育学校が参加してディスカッションをしました。その時の様子を紹介させていただきます。全部で8月の18日、19日、20日と3日間です。これが1日目で日本の参加校の高校生が本校に集まり、まずSDGsについて、それから次の日の留学生とのディスカッション内容等について教育学部長の高井先生からレクチャーを受けました。当日は総長に挨拶をいただき、経済学部の土井先生にもSDGsとディスカッションの仕方についてレクチャーを受けました。当日の人数は約30人の日本の高校生と百十数人の高校生留学生、それから名古屋大学の留学生39人、合計約200人で経済学部のカンファレンスホールで開催いたしました。SDGsは全部で17項目ですので、それを20グループに分けて経済学部の演習室を借りて言語は英語で進めました。これが3日目最終日の様子です。本校の交流ホールを使ってポスター1枚にまとめて発表をしました。最終日も総長が出席していただきましたが、この時気付いたのは国民性なのか大体積極的に話すのはAFSの留学生でした。このようにポスターセッションをし、最後に再度土井先生に講評をいただいて終わりました。本当は1日半くらいディスカッションをさせたいと思ったのですが、今回は3日目の午前中だけでした。AFSさんからせっかく名古屋に来たので勉強だけでなく観光がしたいとの願いもあり最後は名古屋城観光という3日間を過ごしました。これを何か形に残したいということで、生徒たちが作成したポスターを1つの画集として生協に作成依頼中です。画集には総長と土井先生、それから三小田先生の挨拶文と写真も掲載し、この5

年間の集大成としたいと思えるものになりました。今年度でSGHは終了ですが、今回の高校生アジア国際会議のようなものは次に私たちがエントリーしたいと考えているプログラムで推奨されていることなので、名古屋大学全体の協力もありそれを前取りした形で出来たので実現してよかったと思っています。以上です。

・毎年海外から留学生、長期、半日程度の短期含めて300人弱の高校生がこの学校に来ます。その際、日頃使っている英語は何のために勉強しているのか、勉強したことがどのくらい伝わるのかということ必ず何かしたの交流を持つようにしています。今度12月の初旬も台湾から高校生が30数人来校します。その時、高校生だけでなく中学生も交流するのですが、今日希望をとったらもう既に交流をしたいという中学生が沢山います。そのためには英語力が必要となり英語力がどのくらい伸びているのかを測っています。これで4年目になりますが英語力調査のGTECを中学2年生から高校2年生まで受けています。本校はGTECを学びの基礎診断にも使っています。文科省が言っている学びの基礎診断で、高等学校で一人ひとりがどのくらいの力を持っているかその学力の基礎を何かしらのツールを使って測りなさいというもので、それを元にいわゆるNo Child Left Behind構想だと思いますが、本校もすべての子たちに取り残さない教育をと掲げているので、そういった子たちにもどのような教育ができるのかということを考えるためにも使っています。A2レベルというのは中学生3年生をちょっと超えたくらいのレベルだと思います。高校生はA2がメインですがB1の子たちも以前と比べて大分増えてきていますし、B2の子たちも出てきているということが成果かなと思います。大学入試の英語で外部業者が使われるという時、多くの大学でA1、A2レベル以上の力を持った子たちが大学受験の対象になるという評価がありましたが、本校ではA2レベルはほとんどの子が持っているということです。その下にもありますようにGTECの他にケンブリッジのベンチマーキングプレテストも去年やってみたところ、このCレベルの子たちが大分出てきたというのも1つ大きな特徴だと思います。もう1つは国際開発研究科の山田肖子先生が中心に開発しているアフリカのほうで英語力を測るステートメントテスト作成にも協力させていただいており、子どもたちの英語力を測ったりもしています。このように様々なツールを使って子どもたちの英語を測っています。そして左の22ページ、課題研究で子どもたちの意識の変化等を測っています。課題研究をやることによってSGHの本来の目的である、子どもたちの「物事の本質を理解する力」、「国際的視野」、「探究し続ける力」等です。「判断力」はどうかということ在意

識調査として計っています。その結果ですが、本校は高校で1クラス外進生が入って来ますので、内進生と外進生で意識調査を分けていますが、内進生のほうが先ほどもありましたように中学の時からグローバルコミティジュニアや課題研究等をずっとやってきていることもあるかと思います。

・高校から受験する親御さんや生徒は、ここがSGHをやっているのを知っているのですか？

⇒知っています。SSHもやっていますので、理科的とか数学的なことを期待して入ってくる子もいますし、また今の私たちがやっているのは文理融合型ということ、SSHをやりながらSGHもやるというので文理融合というのを掲げていますので、理科しかできないとか文系だけしかできないということではなく、理系の部分も国際的な力を伸ばすことができるということで選んでいただくことが多いのではないかと思います。

・説明会ではブースで待っているとそういった質問といいますか、「何ができますか?」「海外に行くにはどうすればいいんですか?」とか、SSHだと「大学の研究室に行く機会があるか、どうすると行けるか?」等の質問を受けます。

・他は保護者評価に関しても取っています。最近は保護者が学校を選ぶ傾向が多いようです。子どもたちが選ぶというより保護者も自分たちの子どもたちにどういった教育を受けさせたいかということが強く働くようで、保護者の意向もあり本校を選んでもくれる高校生が多いことも分かると思います。保護者評価に関しても高校生になると一般的には「受験勉強をさせなさい」や「協同的探究な学びやっているより受験勉強させてほしい」という保護者も増えていく傾向にある学校が多いと思われませんが、本校の場合は高校3年生の保護者であっても「自分の生き方や将来についてこの学校は考えさせてくれる」、また「いわゆる受験勉強だけではなく、環境だとか国際理解だとかそういうことについて非常に熱心に取り組んでくれる」、「答えのない課題に取り組むための機会が多くある」とアンケートで答えてくださっているのが1つの特徴ではないのかと思っています。そのほかにも「海外の文化に興味を持つための機会がある」や、「英語でコミュニケーションをする機会」、「子どもが将来留学をしたいと思うような取り組みが多くある」等、そういったアンケートの答え方をしているということで、生徒だけではなく保護者も理解をしてくださっています。次は子どもたちの意識調査だけでなく思考力調査を記述型の思考力調査とそれから子どもたちの意識調査を2本、本校のSGH評価を測るための評価方法として作っ

ています。記述型調査に関してはそれぞれ子どもたちが文章で答えを書いてきます。それを水準0から水準3まで分け、その水準ごとにどのくらい子どもたちの意識が高まっているかというクロス集計したのになります。

5) 授業見学

6) 助言・指導

- ・学生たちの様子を見ていると毎回感じるのですが、大変明るくて積極的に非常に良い印象を持っています。それから先ほどの三小田先生の説明でも保護者たちも評価しているようですし、小・中学生もこの学校に対して受験希望のような人気があるようで非常に嬉しく思います。

- ・また是非、次の新しいプログラムに採択され、やってもらいたいと思います。特に私から申し上げるようなことはありませんが1つだけは申し上げると、非常に成果が上がっていると思うので、プログラム自体は指定がなかったとしてもこれは是非ずっと続けてもらいたいと思います。ただ、時々生徒たちが伸びているかその評価をしないといけないので、その時どういう観点で評価するか色々な観点の評価があると思いますが、ここは3年生の時点で論文を書き、その論文を先生たちがしっかり時間をかけて読み取ることができるので、論理的な文章力、論理的な文章を書けているかどうかという点などは成長をはかるメルクマールと出来るのかと思います。他に話題や手法等色々あると思いますが、最終的にその論文を通しての論理的な表現というものを基準にして評価していただくようにすれば良いのではないかと思います。あとは成果を率直に評価して良かった点と課題にしている点というのを明かし、それを是非、全国の学校の参考にしてもらいたい。全国の学校もこのような学校になっていてもらいたいと思っています。

- ・企業の立場からいうと、ここのテーマの「物事の本質を捉える」という力をつけていくという事は企業の中でもものすごく必要なもので、しかしなかなか育たない。企業に入ってから我々が育てるのに大変苦労していますが、考え方の訓練というかそういうものが出来ている人とやったことがない人では全然違うと思うので、先ほどのOBのアンケートでいずれ就職した人のアンケートが出来るとなった時、そこで「ここで受けたことが就職しても自分の力になっている」という評価が出来たら本当に良いなあと思います。あとは今、経営者を離れて色々な複数の会社に行っているのですが、リーダーが足りないんです。例えばシステム

もそうですがプロジェクトマネージャーというのでしょうか。何かプロジェクトがあってそれを動かしていく人が非常に足りません。これはたぶん日本人のダメなところだと思うのですが、自分でリーダーシップをとって自分で動いてしまうという人が多いんですね。個人としてとても優秀な人が今多く出てきていますが個をまとめて組織の力として、個の足し算以上にパワーを生み出していくという人が本当に少ない。これが世界の企業との競争に勝てない一番大きな原因のような気がしています。もし、そういうことを考えていただけるのであればリーダーシップ論的なことをこの中で触れていただきたい。ちょっと理想が高過ぎるかもしれませんがどこかで触れていただくと嬉しいんです。個の能力は十分な子がここにはいるから出来ると思います。企業の立場からいうと少し贅沢な要望になりますが、そういった点を意識して人材育成を考えていただけると有難いと思います。

- ・私は今日は楽しく対話が出来てよかったです。やはり実際に話をしてみてもおおよそどれくらいのかがついているのかが確認が出来たというのが大きかったです。それから実際に彼らが使っているツール等も実際に見せてもらいながら「使い勝手はどう？」みたいな話も聞かせてもらった。その中で感じるの、やはり問題意識のようなものをしっかり持つことが出来ている生徒さんが大分多いかなということです。PBL的に言えばもちろんゴールとプロセスもとても大事ですが、やはりどういう問題をそこに立てるかというのが非常に重要なので、そういう点から言うと着想とかアイデアとかそのようなもの、柔軟な思考能力・観点等が大事だよということをしっかり伝えられてあげられるような教育であるべきだなと思いました。さっきの例で「図書館になかなか来てくれない」と高校生が議論をしていてそこに僕も参加したのですが、例えば大学でも理系の先生が持っている図書館像と文系の先生が持っている図書館像は全然違うよ、それと皆さんが1階の生徒を3階まで連れていくのがどれだけ難しいかというのとひょっとしたら同じかもしれないから、それくらい例えば立場が違う人がいたらそれぞれの図書館像っていうのは実は大分違うんじゃないのかな、みたいな話をすると「あ、そうかな」と気付いてくれる。それは多分彼らは気付いていた。そこにちょっと私は言葉をかけただけ。でもそういう小さな気付きを自分の中にずっと消化できるという力を持っているんだなというのを実感できたのは大変嬉しかったです。PBLの一番目指すところは何が問題かというのを自力でどれだけしっかりと掴み取ることが出来るかです。そういう力が徐々に付いてきているんだなというようなことを実感いたしました。

・いつも勉強させていただいて素晴らしいなと思っております。今日も生徒さんと話しをさせてもらって、図書館の貸し出し数のところであるグループの子たちが景品を出したい、景品を出したら増えるんじゃないかと。実際それがあつたらしいのですが、その時は数字があがったけれども、やはりそれは借りるだけで本当に読んでいるのかもわからないということで問題だね、と。やはり読書の価値と結びつくような景品というか、プラスの何らかのものを考えたいということで悩んでいましたので、やはりただ与えられたお題としてどうやって貸し出し数を増やすかということの背後にある読書の意味というものを考え、問題を捉えて課題に取り組んでいるなど感じました。更に、私はESDからSDGsということでやっているのですが、SDGsと少し強引につなげて考えるならば、SDGsは今、何でもかんでも紐づけしてこれが8番だ4番だと紐づけが悪い意味で問題になっていますがそこにも意味はあると思います。今日1から6の問題をそれぞれ中心においてじゃあこの食の習慣の乱れが貧困とどう関わっているんだろうとか、ジェンダーとどう関わっているんだろうとか、もっと言えばエネルギーとかそういったものと絡めて考えていくというのはやはりその問題の広がりとかその背景、さらに深く色々なことを考えることが出来ると思いますので、単にこれが2番だとか4番だというのは意味がないかもしれませんが、1つの事象やテーマを17項目で見ていくことでその問題が社会の全体的な多々ある課題の中でどういう位置づけにあるんだろうとか、解決策に関しても違った視点から思い付くようなことがあるのではないかと思いますので、そういったことも今後SGDsもあと10年くらい続きますので、取り込める余地があるのかなという気がしました。それからSGHは5年目、最終年ということで、いつも先生方の素晴らしいチームワークが素晴らしいなと思っていますのでそのコツをお聞きしたいという気持ちもあります。そういう意味では持続可能な運営体制というのがどのように培って来られたのかということも何らかの形で記録をされておくのもいいのかなと思います。最後に新しいコンソーシアムに関しては、私どももこの愛知・岐阜・三重のESDのネットワークということでやっておりますので、何らかのことで関わらせていただけたらと思います。またこの中部EDS拠点以外にも、愛知学長懇話会という愛知県の50大学の学長ネットワークの中に学長懇話会のSDGs企画委員会というのを立ち上げました。そういったネットワークもコンソーシアムの一部として関わるような申請の仕方をするといいいのかなという気もします。

5. 学校長挨拶 閉会

(文責 三小田博昭)